
MOON-4 夜叉 4

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4

【Nコード】

N 4 9 6 7 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

謎の少女 桜を追う秀の前にもう一人の青年が現れた。和人は最近の『夜のざわめき』と何らかの関係があると推測する。――

ヴァンパイア
現代版吸血鬼伝説 MOON 『夜叉』 第4話です。

榊 - 1 (前書き)

主人公が何にもしてませんねー (海斗小説でよくある事) (¥)

それから数日後の週末、裕希は和人の紹介で決まった新宿大通り沿いの

MACでシフトに入っていた。

店内は昼時ともあって混雑している。接客人数が足りない程だ。

そこは

新宿で一番売上のある店だった。

「チーズ・バーガー一つにアイス・コーヒーのし、それとポテトのMですね。」

始めは戸惑いの多かったバイトだが、そのうち顔見知りも出来て楽しくなっていた。

職場での人間関係も良い。

理由はこの店の店長がフリーターや登校拒否を起こして学校に行かなくなった若者を1回の面接で採用するためだった。

自然、何をしたらいいのか、あるいは自分の決めた道を歩きたいという若者がその『噂』で集まって来る。大型店だし、バイトの人数も多い方がいい。働く側にとっても店の管理者にとっても相互の関係である。

「お次のお客様、お待たせしました。」

と、そこまで言った時、背後の先輩女性が裕希に声をかけた。

「もういいわよ、休憩時間だから。」

「でも、お店混んでるし・・・」

「大丈夫よ、何とかなるわよ。」

店内の喧騒の中、イラストレーターを目指す17歳の香は裕希に休憩を促した。

「じゃ、あと5分したら・・・」

と、彼女に向かって言った時、

「いい？」

裕希の入っているカウンターへ声をかける男性がいた。
「いらつしゃいませ。」

裕希は制服の帽子を正して振り替えた。
そこには、一人の青年がいた。
切れ長の目に黒のカジュアル・スーツ。
身長も人くらいだった。

「ご注文は。」

そう言うと、背後から香の、

「ちよつと、裕希くん！イケメンじゃないの。」

嬉しそうに声をかけてくる。「今すぐ休憩入っていいわよ、私が
入るわ。」

「そう?。」

裕希は、やっぱり女の子なんだなー、と大人びた化粧姿の香の事を
思う。

「サポートしてから休むよ、香さん。」

「ええ……」

心ここにあらず、という感じで彼女は、

「ご注文はお決まりでしょうか?」

スマイル0円を満面に浮かべた。

「ホット・コーヒーとポテトのSを一つずつ。」

「招致しました、少々お待ち下さい。」

香は振り返ると、裕希はもうバックに入りポテトの所にいた。そ
して、

素早く帰って来る。

「香さん、ポテトあと3分。」

小声で声をかける。

「OK。」

香は青年に視線を戻し、「ポテトの方が少々お時間を頂くのでお
席の方まで
お持ちします。」

「ありがとう。」

ハスキー・ボイスのよく透る声。「じゃ、あの窓際の席に。」

「かしこまりました。」

店内は混雑していたが、禁煙席にはまだ余裕があった。青年はその席を指示した。

「お会計は……」

香が応対をする中、裕希はポテトの所に行った。

よくは見なかったけど。

何処かで会った気がした。

（そんな事ないよね。）

裕希はそう思い、ポテトの揚げあがりが出るまでバックの仕事をしていた。

「裕希くん、もういいよ。」

同僚の男性が声をかけた。「ポテト。」

「はい。」

素早くチキン竜田の包装をすると青年の所へトレイを持って訪れた。

「お待たせしました。」

裕希はポテトの乗った茶色のトレイを彼の前に差し出した。

「ありがとう、坊や。」

何気ない青年の言葉に、

（やっぱり何処かで会った事あるのかな。何か始めてのお客じゃないみたい。）

「あの」

室内の喧騒にかき消されそうになりながら裕希は無意識に青年に尋ねていた。

「何処かで会った事ありますか？」

口調は接客を忘れずに。

「そう？」

青年はブラック・コーヒーを一口飲み、

「どうしてそう思うの？」

黒曜石の瞳色だった。

何故かその目に見覚えがある……

「何となく……初めてじゃないと思って。」

裕希は口ごもった。「それだけです。」

視線は。

吸い込まれる様に、彼の瞳を見つめたまま。

そして、脳裏に甦る……

く辺り一面、桜の花びら……その根元を覆い尽くす花卉の絨毯。
幾重にも幾重にも。

薄紅色に染まった天空から、降り注ぐ。

（どこだろう、ここ。）

制服姿の裕希は、手のひらに落ちた花卉の一枚を見つめたまま、
思った。

見たことのない場所。

遙か遠くには、灰色のビル群の姿。

わからなかった。

昼なのか夜なのか、自分はどこにしているのか……

「……。」

裕希は、桜の花卉の絨毯を数歩歩いた。

花びらの嵐で、なかなか見えなかった前がやっと微かに見えた。

「！……。」

桜の樹木の下。

一人の青年が、片膝を着いてじっと足元を見つめていた。

裕希と同じく、もうどれくらい『彼』はここにいるのだろう……

。黒いコートの肩に、裾に、桜の花びらが降り積もっていた。

（誰だろう……。）

カサツ・・・

青年に向かつて、一步、ゆつくりと踏み出す裕希。
と、同時に振り返る青年。

「あつ・・・！」

何処かで見覚えのある、翡翠色の瞳。
碧がかった黒髪。

（何処かで・・・！）

思い出せない。

思い出そうとすると、頭が激しく痛む。

（どうしたんだろう・・・俺・・・！）

微かな焦りが、裕希の心を捕えた。

「だから、来ちゃいけなかったんだよ・・・裕希。」

青年は、静かに立ち上がり目の前の少年にそう告げた。「ここは、
お前の来る『場所』じゃなかったんだ。」

青年のコートから、桜の花弁が舞い落ちる・・・

「誰、あなたは・・・！」

裕希は尋ねた。

そして、何気なく青年の足元・・・桜の太い樹木の下を見た。

「！・・・」

そこには。

桜の花びらに埋もれ、横たわるもう一人の青年の姿。

裕希の気配に気づいたのか・・・青年はゆつくりと瞼を開いた。
それは。

立ちあがった青年とは全く正反対の、闇色の瞳、ビリジアン・ブ
ルの光を放つ瞳を持つ青年。>

「・・・『闇』」

裕希は目を細めた。「あなたは・・・九桜の『側』？」

そう呟いた時。

時間が動き出した。

裕希は身を翻して、店の出口へと向かった。

ガタンっ

（逃げなきゃ、あの人『闇』の人だ！）

背後で席を立ち、裕希へと向かうその青年の気配があつたと、同時に。

ガシャン！

店の通り沿いのガラスが、一斉に砕け散った。青年の持つ『闇』の力だろうか。

「キヤー！」

店内に悲鳴が上がる。

「裕希くんっ！」

出口へと向かった裕希を追いかける青年の姿に、カウンターの中心から香が声を上げた。

何故、追われてるのは勿論、何故、裕希が突如逃げたのかも勿論判らずに………。

（誰も気付かないの？）

新宿大通りを人混みをかき分けて走りながら、裕希は疑問に思った。

（カンだけど、あの人、普通の人じゃない。）

裕希も和人と九桜の『側』との闘いに何度か遭遇している。それらが、

今の裕希の『カン』を鋭くさせていた。

（でも吸血鬼^{ヴァンパイア}じゃない。だって今は昼間だから九桜の側も『出れ

ない』し・・・だとしたら、誰？)

10分程走り三越の脇の小道へと入る。

裕希は肩で息をしながら、

「和人に知らせなきゃ。」

と、Gパンのポケットから携帯を取り出し、

「もしもし・・・」

と言った所で、すつと、背後から伸びて来た手が彼から携帯を奪った。

「!・・・」

振り向くと・・・あの青年がいた。

『誰だ、貴様。』

携帯の向こうで和人の声が青年の耳に入る。

「気付いてたらしいね、帝王。」

「返してよ、携帯!和人っ!」

『裕希!』

青年は裕希を見降ろしながら、

「坊やには何もしてないよ。ちよつと『帝王』に挨拶したくてね。」

「!・・・」

裕希は青年を睨みつけた。

それに気付き、青年は、

「怒ってる様だよ、坊やが、帝王。」

『その子に手を出すなよ』

『声』はすぐ側で聞こえた。

青年の遙か後方に・・・和人の姿があった。

「和人っ!」

裕希は彼目がけて走りだした。それを制するかの様に、青年は彼の前に立ち、

「はい、携帯。」

「!・・・」

裕希の胸ポケットに切れた携帯を戻し、青年は裕希に言った。

「君は心配いらないよ。」

携帯を片手に持つ、和人と謎の青年を交互に見つめる裕希。

青年は、

「お嬢が欲しがっているのは、坊やでも帝王でもないから。」

「・・・」

和人は思い威圧感を周囲に与えながら、そこに立っていた。

その台詞は和人に告げられたものか。

裕希に告げられたものか・・・。

彼は踵を返すと、人通りの多い大通り方向へ静かに歩いて行つた。

「ちよつと待つてよ！」

裕希はその背中に向かって叫んだ。「もしも和人の身に何かあったら、

ただじゃすまないからね！」

青年は振り返りもせず軽く右手を上げ、

「やがて、そうなると思うよ。坊や。」

「！・・・」

どういう意味、と問いかけたがそれがそれを許さない威圧感が和人と

同じ様に青年にもあつた。

黙つて青年を見送る2人。

周囲は何の変わりもない、週末の賑わいを見せる新宿。今は『昼の住人』の世界^{もの}。

「大丈夫か、裕希。」

小走りに駆け寄つて来る裕希に、和人は声をかけた。

「急に、バイト先に来たんだ。」

「そう・・・」

和人には何かしら考える所があるらしい。

翡翠色の瞳でその青年の去つた後をじつと見つめている。

「変なお兄ちゃんだねー。」

やたらのんびりした、聞き覚えのある声がまた背後から聞こえた。振り返ると、

「大丈夫らしいな、裕希。」

秀だった。

「秀さん！」

裕希は2人の出現に胸を撫で下ろした。

そこは。

かつて、裕希が初めて『闇』と接した場所。

『変えてあげるよ、お前の運命を』

「どうやらタダものじゃないみたいだな、ダンナ。」

秀はニヒルに笑った。

「らしいね。」

和人の視線は、まだ前方へ向けられていた。「最近の『夜』の“ざわめき”と関係あるらしいな。」

「とりあえず」

秀は言った。「マンション（うち）へ帰ろう・・・・・・ってか。」

「何だよ、秀。」

「和人ちゃん、謹慎中でしょ。」

「お前が勝手に決めた事だろ。」

「朝子も監視が悪いなー。」

「人のせいにするな。お前がはっきりと言わないからこうなるんだ。」

「秀さん、今頭の中いろんな事でいっぱいなの。」
と、舌を軽く出す。

「朝子さんは大丈夫かな。」

裕希が心配そうに、和人のワイシャツの袖を引っ張る。
「そうだな。」

和人は頷き、「早く帰ろう……昼間なのに、『闇』の臭いがする。」

静かに言った。

『満月』まで、あと3日。

柗・1（後書き）

はい、原稿書きます（――）／＼＼＼＼＼日曜日で「お暇」という方は『WOLF・』
『BOY・』をお読みくださいます、そこには『夜叉』の謎が隠されています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4967m/>

MOON-4 夜叉 4

2010年10月11日20時36分発行